

ほとんど知らない オーケストラの話

(第2回)

あうん

東京フィルハーモニー交響楽団
専務理事・楽団長
石丸 恭一

来年こそ東京オリンピックが開催される事を期待しているところです。号砲一発スタートを切る。わくわくしますね。

クラシックオーケストラの演奏は100名近くにもなる楽員によって演奏されます。

演奏会では舞台の上に様々な楽器と燕尾服で正装した楽員が並び、盛大な拍手に迎えられて指揮者が登場、徐に客席に背を向けたかと思うと棒(タクト)を振り下ろします。すると100名の楽員が一斉に一糸乱れず演奏をスタートするのです。

指揮者によってはタクト(棒)を持たず手だけで振る事もあります。タクト(棒)というのは本当はなんでも良いのです。たとえそれが割り箸でもボールペンでも、長くても短くても。実際に数百年前には杖で床を打って指揮をしていた事もありました。それは旗であっても良いわけで指揮は旗を振る動きと同じ働きしかしないと言う事でもあるのです。

ではオリンピックに戻って、水泳、100メートル走のスタートを指揮者が行うとどうなるでしょうか。手近にあるボールペンか割り箸をお持ちになり水泳のスタート合図をやってみて下さい。その際は「よーいドン」と発声はしないで下さい(指

揮者は声を出せません)。選手は結構間抜けなスタートになる事が想像できると思います。

そうなのです、大勢のオーケストラが指揮者の棒の一振りだけで同時にスタートを切れるのでしょうか。

では競技を日本の国技、相撲の取組のスタートとします。ご存じの通りよーいドンはありません。行司は号令も棒も振ってはならず、仕切り直しを繰り返しながらお互いに間を計って気が合ったところで取組はスタートします。この間合いを日本では「阿吽の呼吸」と言います。

実はオーケストラの演奏は「阿吽の呼吸」で始まるのです。

阿吽は東洋の仏の言葉であり、クラシック音楽は西洋のキリスト教に基づくと言われていました。クラシックオーケストラが時を超えて世の東西を問わず親しまれるのも阿吽の呼吸という神の言葉に基づくもので作曲されていることがその理由ではないでしょうか。

かくして指揮者のタクトと「阿吽の呼吸」で始まったベートーベン交響曲第五番「運命」は一糸乱れぬ四十分の演奏を「あうん」の呼吸で終わるので。